

サムエル記下 17 章 24 節～19 章 1 節

2025 年 10 月 29 日(水)

はじめに

本日は 17 章 24 節から 19 章 1 節までを学びます。アブサロムが率いるイスラエル軍とダビデが率いる軍とが戦い、イスラエル軍が大敗し、アブサロムも討ち死にしたことを語っています。

この戦争は、これまでのような他民族との戦いではなく、父ダビデと三男アブサロムの戦いであり、イスラエルの王とその王子との戦いであって、反乱鎮圧のための戦いです。悲劇以外のなにものでもありません。

では、聖書は、こうした記事をとおして、一体、何を告げているのか。神はこの悲劇においてどのように御心を示しておられるのか。そのことを御一緒に学びたいのです。

I サムエル記下 17 章 24 節～19 章 1 節のの流れ。

そこでサムエル記下 17 章 24 節から 19 章 1 節までの話の流れを見てみましょう。17 章 24～26 節では、ダビデたちがヤボク川の流域にあるマハナインに着いたところ、アブサロムのイスラエル軍もヨルダン川を渡って、ギレアドの地に陣を敷いたことが言われます。

17 章 27～29 節では、ダビデたちがマハナインに到着すると、アンモン人ショビ、ロ・デバルのマキル、ギレアド人バルジライの三人が、ダビデ軍に支援物資を提供したという記事です。

18 章 1～2 節は、ダビデは戦争に備えて、軍を編制したことがいわれています。続く 3～5 節では、兵たちがダビデに、出陣しないように求め、ダビデがそれを受け入れた記事、またダビデが全軍の前で将軍たち全員にアブサロムを手荒に扱わないようにと命じた記事です。

18 章 6～18 節は、ダビデ軍がイスラエル軍に勝利したという記事です。注目すべきは 8 節の後半で「その日密林の餌食になった者は剣が餌食にした者よりも多かった」といわれていることです。続く 9～18 節は、その密林の餌食になったアブサロムを、ヨアブが殺害し、ひそかに埋葬した経緯が語られています。

18 章 19 節～19 章 1 節は、ダビデ軍がイスラエル軍に勝利したことを二人の者が、ダビデ王に知らせた記事です。まずツァドクの子アヒマアツがダビデ王に戦勝報告に行こうとしますが、ヨアブはそれを押しとどめ、クシュ人が報告しに行くことになります。しかし結局、アヒマアツもでかけ、途中でクシュ人を追い抜き、彼がまずダビデ王に先勝報告をします。この時、アヒマアツはアブサロムのことには触れません。しかしその後クシュ人が到着し、戦勝報告をするとともにアブサロムが戦死したことを伝えました。それを聞き、ダビデ王は、アブサロムの名を三度、わが息子と五度呼んで、慟哭しています。

以上のことを箇条書きにすると、次のようになります。

17 章 24～26 節 アブサロムとイスラエル軍、ギレアドの地に陣を敷く

17 章 27～29 節 ショビ、マキル、バルジライ、マハナインのダビデ軍に支援品をもってくる。

18 章 1～2 節 ダビデ、出陣にあたり、軍を三部隊に組織する

18 章 3～5 節 ダビデ軍、王が前線に出陣することなく後方の町にいるようにという。

ダビデ、全軍の前で、将軍たちにアブサロムを手荒に扱わないように命じる。

18 章 6～8 節 ダビデ軍、イスラエル軍と戦い、勝利する。

18 章 9～18 節 アブサロム、ヨアブに殺害され、埋葬される

18 章 19 節～19 章 1 節 アヒマアツとクシュ人による戦勝報告とダビデの慟哭。

Ⅱ. サムエル記下 17 章 24 節～19 章 1 節の解説

【24～26 節】

ここで注目すべきは、24 節で「**ダビデがマハナジムに着いたころ**」といわれ、27 節では「**ダビデがマハナジムの着く**」といわれていることです。ダビデの行動を主に語り、それに従属するかたちでアブサロムとイスラエル軍の動向が記されています。明らかにダビデの主導権がいわれているのです。しかもこの主導権はダビデの知恵や戦略によることなく、ただダビデが信じる主の導きの中で起こっていることなのです(Ⅱサム 15:25、16:12)。

さてマハナジムは、ヨルダン川に東から流れ込むヤボク川の南岸にあり、レビ人の町であり、「逃れの町」でした(ヨシュア記 21 章 38 節)。また一時、サウル王の家臣アブネルは、王の死後、遺児イシュ・ボシェトを擁立し、この町でイスラエルの王に即位させました(Ⅱサム 2:8～10)。ですからマハナジムは、それにふさわしい城壁に囲まれた町であったと思われます。

他方、アブサロムとイスラエル軍は、ダビデ軍の後を追ひ、ギレアドの地に陣を敷きます。この時、アブサロムはアマサをイスラエルの軍の司令官に任命します。ダビデには姉ツェルヤとアビガイルがいましたが、アマサはアビガイルの息子です。つまりツェルヤの息子たちヨアブとアビシャイはダビデの軍の司令官になり、アビガイルの息子のアマサはアブサロム率いるイスラエル軍の司令官になったということです。ここからも分かるように、これから行われる戦争は、骨肉の争い、ということになるでしょう。

【27～29 節】

ダビデ軍がマハナジムに到着すると、ショビ、マキル、バルジライの三人がやって来て、ダビデとその軍に支援物資を提供します。シャビはアンモン人のナハシュの子です。かつてサウル王の時代アンモン人はイスラエルに敵対していましたが、ダビデ王によって平定され、友好関係にありました。またマキルは、かつてヨナタンの遺児メフィボシェトを匿って助けたことがあります(Ⅱサム 9:4)。バルジライはギレアド人ですから、アブサロム軍が陣をしいた地域の人です。そうしてみるとギレアド地方の人々は、ダビデを支持し続けたものと思われます。

彼ら三人は、ダビデとその兵たちの飢え渴き、疲弊などの窮状をよく理解し、必要な食糧などを提供したのです。その中で、28 節の冒頭に出て来る「**寝具、たらい、陶器**」は、おそらくはダビデ王の家族を思いやってのことと思われますが、実に配慮が行き届いた支援なのです。

【18: 1 ～5 節】

さてダビデは、会戦に備え、改めて兵を調べ、組織します。千人隊の長、百人隊の長を任命します。その上で兵士を三部隊に編制しました。ヨアブ率いる部隊、アビシャイ率いる部隊、そしてイタイ率いる部隊に編制したのです。イタイはダビデに見事な忠誠を誓ったガド人です(Ⅱサム 15:21)。ダビデはこれらの三部隊を率いて出陣するつもりでした。しかしダビデ軍の兵たちは、ダビデがこの戦に出陣せず、マハナジムの町に留まるようにと進言し、ダビデはそれを聞きいれます。兵たちはダビデが王国にとって要となる重要な方であることをよく弁え、万一戦死しないように配慮したのです。他方ダビデは、全軍の前で、ヨアブ・アビシャイ・イタイの三人の将軍にアブサロムを「**手荒く扱わないように**」と命じています。生け捕りにすることを願ったということではないでしょうか。

ともかくここではダビデ軍の兵たちがダビデ王に見せる忠誠と、ダビデ王の「わが子可愛さ」は対照的です。イスラエルの王としてのダビデと父親としてのダビデとに気持ちが分裂しているの

かもしれません。そのためダビデは従来どおりイスラエルの王として戦に出陣し、自らの指揮によりアブサロムを生け捕りにすることもできたはずですが、そのような道を思いつくこともできなかったのです。

【18:6～8】

この部分はダビデ軍がイスラエル軍と戦い、勝利したことを告げています。聖書は、この戦闘における個々の兵の活躍を語りません。どのような武器を使い、どのような作戦で戦ったのかを語らないのです。その代わりすでに触れたように「**その日密林の餌食になった者は剣が餌食にした者よりも多かった**」と告げています。つまり人間の側の力ではなく、自然を用いる主の力がはるかに優位であったと述べているのです。この「密林の餌食」とは、「**エフライムの森**」の起伏に富んだ険しい地形と深い森のために事故死した、ということを示しています。どんなに優れた武装をしても、どんなに優れた作戦行動をしたとしても、自然の力の方が優っていたのです。そのように「密林の餌食」になった者の中にアブサロムもいたのです。

【9～18 節】

アブサロムは、ラバに乗っていました。そのためラバが樫の大木のからまりあった枝の下を通ったとき、頭がその木に引っかかり、天と地の間に宙づりになってしまったというのです。ラバはそのまま行ってしまったからです。アブサロムは美しい頭髪が豊かな人でしたから、それがあだとなったのかもしれません。しかしまた戦ですから兜をかぶっていたのかもしれませんが、その兜は豊かな頭髪のため大き目であったと思われます。ともかく頭が木の枝にひっかかってしまい、身動きが取れなかったのです。

この個所で注目したいのは、「**天と地の間**」という表現です。これは奇妙でいささか大袈裟な表現です。密林であるなら、空は見えません。木々の枝葉に覆われているからです。またこの地域はエフライムの森ですから大地全体は見えません。聖書はどうして「天と地の間」というような大袈裟な表現をしているのでしょうか。「天と地の間」とは、神と人間の間ということです。そこは、神に献げられた犠牲が煙となって上っていく空間であり、後に仲保者キリストの立つ場所です。ですからアブサロムは犠牲として献げられていることを暗示しています。

そこでアブサロムを見つけた一人の兵がヨアブに報告しました。するとヨアブは、何故その場で地に撃ち落さなかったのかと問います。そうすれば、褒美として銀十枚と革帯一本を与えたのにというのです。そこでこの兵は、自分たちは王子を手にかける事は出来ない、というのです。それは第一にイスラエルの王は神が立てた方であり、その方の王子であるからです。第二にダビデがアブサロムを守れと命じていたからなのです。ですからもし自分がアブサロムを手につけたら、自分はあなたによって非とされるに違いないと述べています。要するにこの兵は戦の常識でいえば、敵の大將首を取ることは当然である、しかし自分たちの敵である大將はダビデ王の王子であって、しかもダビデ王自身がアブサロムを守るように命じていたので、どのように対処すべきか。その判断を将軍ヨアブに求めたのです。実に忠実な兵です。

しかしヨアブは、その兵がアブサロムを討たないと知ると、自分がアブサロムの所へ行き、棒を三本手に取り心臓を突き刺して殺害しました。ところで棒は普通鎧をまとった胸を貫くことはできません。ですからこの棒は先端を尖らせたものか、予備の槍の柄の棒のことで、その先端は石突きがついていたわけです。そのような棒を使ったのではないのでしょうか。尚、聖書協会共同訳は「投げ槍」と訳出しています。さてヨアブがアブサロムの心臓を突いた後、ヨアブの従卒 10 人がアブ

サロムを討ち、とどめを刺したわけです。明らかに王の命令違反です。しかしアブサロムは、この戦争を早く終わらせるためには、アブサロムの大將首を取ることが必要であると軍人として判断したのです。だから彼は、アブサロムを殺害すると、角笛を吹きからならし、この戦の決着はついたので、撤収するようにと合図をおくったわけです。こうして殺されたアブサロムは、森の中の大穴に投げ込まれました。そしてヨアブたちはその上に石を積み上げて非常に大きな塚を作ったわけです。アブサロムは葬式もなく埋葬されたわけです。

他方、アブサロムは、生前、自分の墓碑を王の谷に立てていた、というのです。それは、兄弟殺しの自分には後継ぎの息子がなく、名が絶えると思ったからなのです。しかし実際には 3 人の息子とタマルという娘が与えられていました(Ⅱサム 14:27-9)。そうしてみると、アブサロムは、主なる神の恵みが分からず、自分で自分を始末することを考えていた悲劇的な人ということができるのではないのでしょうか。いずれせよ、アブサロムの反乱はここで終わったのです。

【18 : 19～19 : 1】

ここは、ダビデ王に戦勝報告をどのようにするのが語られています。最初は、ダビデによって秘密連絡係に任命されたアヒマアツが戦勝報告に行こうとします。しかしヨアブはそれを止めるのです。理由は王の息子が死んだのだから、日を改めて報告したいからです。そしてヨアブはクシュ人に戦勝報告をさせることにしたのです。ヨアブは、アヒマアツがダビデ王の信頼を受けた者であることを知っていました。ですからアブサロム殺害の件で非難されるのを恐れたのではないのでしょうか。しかしアヒマアツは、ヨアブの制止を振りきって出発し、クシュ人を追い抜き、先にダビデ王に報告します。

ダビデ王はマハナイムの二つの城門の間に座って戦争の行く末を案じていました。そこへアヒマアツが到着し、ダビデ軍が勝利したと知らせます。しかしダビデ王は、それを喜ぶのではなく、息子アブサロムの安否を尋ねます。そこでアヒマアツはそれについては知らないというのです。すると次にクシュ人が到着しました。彼も戦勝報告します。しかしこの時もダビデはアブサロムの安否を問うのです。そこでアブサロムは戦死したことを告げたのです。するとダビデ王は、**「身を震わせ、城門の上の部屋に上って泣いた」**というのです。しかも彼は上りながら、**「わたしの息子アブサロムよ」**と幾度も叫びました。その時、**「わたしがお前に代わって死ねばよかった」**というのです。ダビデ王家では長男アムノンが異母姉妹タマルを凌辱したこと、タマルの兄で三男のアブサロムがアムノンを殺害したこと、こうした出来事が続きましたが、ダビデは肉親として深い愛情をもっていたでしょうが、イスラエルの王として主なる神の御心にかなった公平な裁きが出来ませんでした。ダビデ王自身かつてバトシェバを奪いその夫ウリヤを殺害したことがあるためです。預言者ナタンがダビデの罪を赦す宣言をしたとはいえ、ダビデは王としての務めにつくことに迷いをもつようになったのです。こうしてアブサロムの反乱にいたったのです。

ですからダビデは、こうした一連の出来事は自分の罪に対する神の罰であることを承知していたのでしょう(Ⅱサム 12:14)。本来なら、アブサロムではなく、自分が「天の地に間に」宙づりになって神に裁かれて死ぬべきである、ダビデはそう思ったのです。しかし主なる神はダビデ王朝を建てるために、その代償としてアブサロムに罪を着せ滅ぼしました。その意味で、アブサロムは「天と地」の間で、神と人間の間で仲保者であるイエス・キリストを指しているのではないのでしょうか。キリストこそは、すべての人間の罪を引きうけて神に裁かれて死ぬという仕方で、罪を取り除き、わたしたちを新しい命に生かしているからです。